

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

平成27年度病虫害発生予報第4号(7月)について

このことについて、病虫害発生予報第4号を発表したので送付します。

予報第4号

ナシの黒星病の果実への拡大防止に努めましょう

ナシ黒星病の多発が依然として続いています。発病している葉や果実は伝染源となり、病気の拡大の要因となりますので、見つけ次第必ず園外に持ち出し処分して下さい。特に梅雨期は果実への伝染が拡大しやすい時期ですので、防除を徹底しましょう。



葉柄に発生した黒星病



幼果に発生した黒星病

カンキツのミカンハダニの早期防除に努めましょう。

県内のカンキツ園ではミカンハダニが多発しています。6月5半旬の調査での寄生葉率は、38.1%と平年の2倍程度高くなっています。ミカンハダニは増殖力が高いため、発生密度が高くなると防除が難しくなるので、早めに防除しましょう。



果実表面に発生したミカンハダニ



葉裏全体に発生したミカンハダニ

<予想される向こう1か月の天候（平成27年6月27日～平成27年7月26日）>

平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多い、日照時間は平年並か少ないでしょう。

週別の気温は、1～2週目は平年並か低く、3～4週目はほぼ平年並でしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低40 並30 高30% ほぼ平年並の見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み	少40 並40 多20% 平年並か少ない見込み

（福岡管区气象台 平成27年6月25日発表抜粋）

7月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

主な病害虫の発生予報概要

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (7月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	セジロウンカ トビイロウンカ	少 並	少 並	並 並
カンキツ	黒点病 ミカンハダニ	やや少 多	並 やや多	やや多 やや多
ナシ	黒星病 ナシヒメシンクイ	多 やや少	多 やや少	並 やや少
カキ	炭疽病 フジコナカイガラムシ	やや少 多	並 多	やや多 並
果樹共通	チャバネアオカメムシ	少	—	少
茶	炭疽病 チャノコカクモンハマキ チャノホソガ チャノミドリヒメヨコバイ カンザワハダニ チャノキイロアザミウマ チャトゲコナジラミ	多 やや少 やや少 やや多 少 少 多	多 やや少 並 並 並 少 —	多 並 並 並 並 少 多
冬春イチゴ (育苗期)	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類	やや少 並 並	やや多 やや多 並	多 やや多 やや多

*果樹共通・チャバネアオカメムシの平年比について、現況は年次変動が大きいため前年比としている
*茶・チャトゲコナジラミの平年比について、平成24年頃まで発生の地域差が非常に大きかったため平年値がなく、現況は前年比としている

作物別発生予報

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、**「少、やや少、並、やや多、多」の5段階**で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。
それぞれの条件は、**少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）**として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。

【普通作物：水稲】

1 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月14日に予察灯（遠賀町）で、初飛来を確認した。

イ 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

10株当たり成幼虫数0.17頭（平年0.78頭、前年0頭）

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

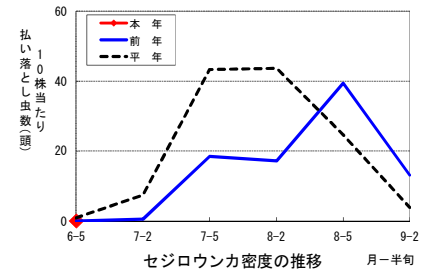
(3) 防除上の注意

ア 今後の飛来状況に十分注意する。

イ 箱施薬剤が施用されていないほ場では、発生状況に注意する。

また、移植時期が早いほ場では、箱施薬剤の残効がなくなっている恐れがあるので注意する。

ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p10の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



2 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

10株当たり成幼虫数0頭（平年0.01頭、前年0頭）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

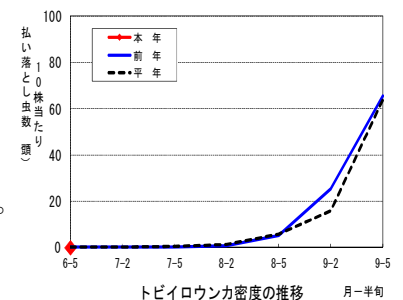
(3) 防除上の注意

ア 今後の飛来状況に十分注意する。

イ 箱施薬剤が施用されていないほ場では、発生状況に注意する。

また、移植時期が早いほ場では、箱施薬剤の残効がなくなっている恐れがあるので注意する。

ウ ほ場内では集中分布するので、ほ場全体の発生状況を把握する。



【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年やや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

発病果率 0%（平年0.2%、前年0.2%）

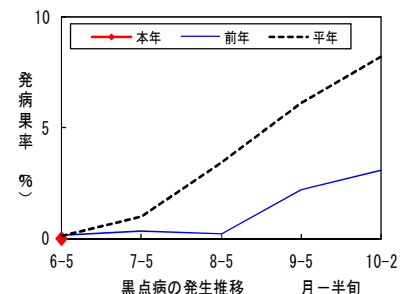
発生ほ場率 0%（平年8.7%、前年9.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p10の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半月調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

寄生葉率 38.1% (平年 21.1%、前年 16.0%)

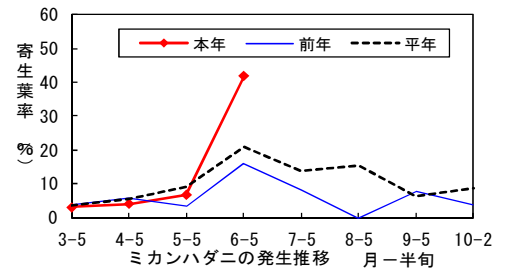
発生ほ場率 72.7% (平年 62.5%、前年 72.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生条件となっている(ー～±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：なし】

1 黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半月調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

発病葉率 2.9% (平年 1.4%、前年 2.7%)

発生ほ場率 90.9% (平年 55.2%、前年 63.6%)

発病果率 1.9% (平年 0.9%、前年 1.6%)

発生ほ場率 54.6% (平年 34.7%、前年 54.6%)

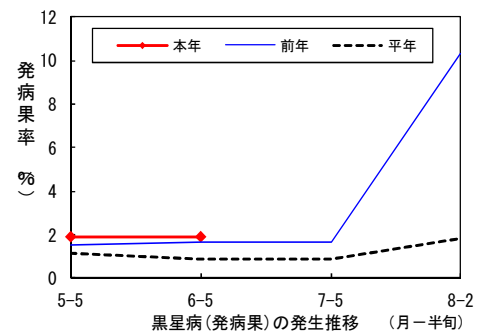
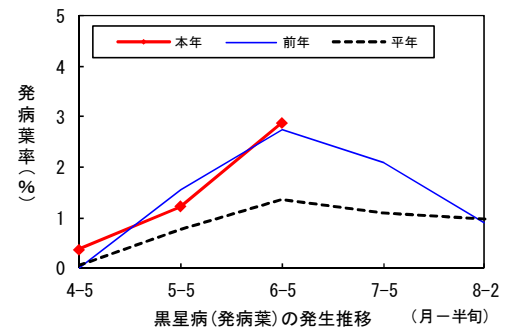
イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生条件となっている(±～+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病葉や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ 薬剤防除にDMI剤を用いる場合は、保護殺菌剤を混用する。ただし、有機銅剤は効果が低下するため混用しない。



2 ナシヒメシクイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

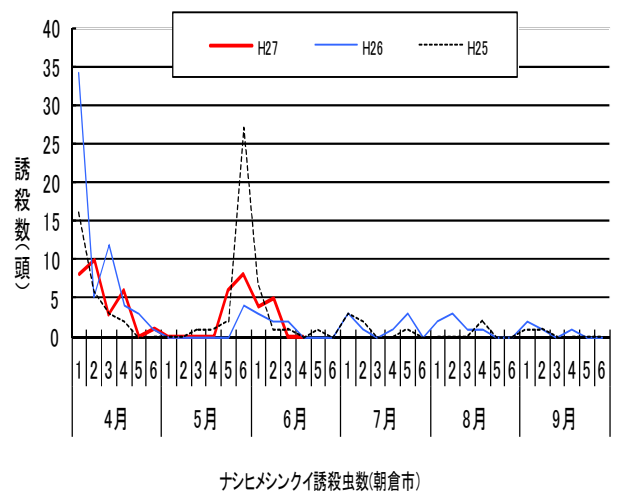
第1世代成虫発生時期である5月4半月～6月4半月のフェロモントラップの誘殺虫数は、23頭(平年 186頭、前年 11頭)(地点名：朝倉市杷木町)で平年よりやや少なかった(ー～±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発蛾最盛期直後を目安に防除を行うが、発蛾最盛期を過ぎても成虫が多くみられる場合は、1回目の防除の7～10日後に追加防除を行う。

イ 幼虫は主に果頂部から食害侵入するので、防除にあたっては果実に薬液が十分かかるように散布する。

ウ 被害果は埋没処分し、発生源を除去する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

発病枝率 0%（平年 0.4%、前年 0%）

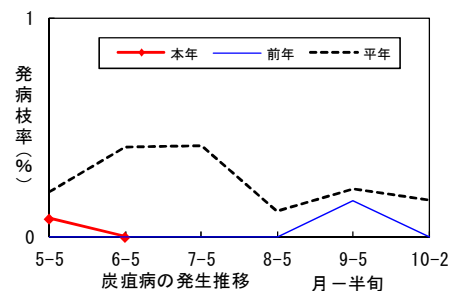
発生ほ場率 0%（平年 13.3%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 前年の発生が多かった園では、薬剤防除を徹底する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年並

(2) 予報の根拠

6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

寄生枝率 7.6 %（平年 6.0%、前年 9.2%）

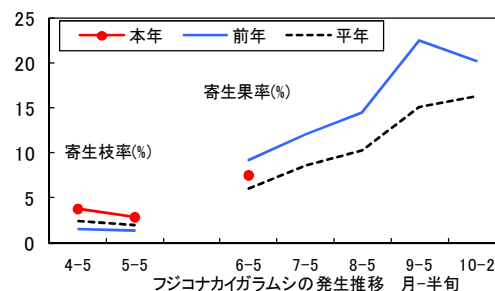
発生ほ場率 75.0 %（平年 66.7%、前年 66.7%）

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、混み合った枝を整理し散布むらがないよう丁寧に散布する。

イ 天敵への影響が比較的少ない薬剤で防除する。防除対策の詳細は、県ホームページに掲載している『病害虫・雑草防除の手引き』を参考にして下さい。

URL : http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/137505_50502708_misc.pdf



【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

(1) 予報の内容

発生量：前年より少、前々年並

(2) 予報の根拠

ア チャバネアオカメムシの1㎡当たりの越冬量は平均0.9頭（前年4.8頭、前々年0.7頭）で、前年より少なかった（－）。

チャバネアオカメムシの越冬量およびヒノキ球果着生量の年次推移

	平成27年	平成26年	平成25年
越冬量(頭/㎡)	0.9	4.8	0.7
ヒノキ球果着生量	やや少	中	中

イ 6月1半旬～4半旬までの予察灯による誘殺虫数は、前年より少なかった（－）。

誘殺虫数 2頭（前年 144頭、前々年 54頭）（調査地点：久留米市）

7頭（前年 64頭、前々年 15頭）（調査地点：うきは市）

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 園内の発生状況の把握に努め発生に応じて防除を行う。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (7月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
なし ハダニ類	少	少	少	・多発生すると防除が困難になるので、発生が少ない時期の防除を徹底する。
かき うどんこ病	並	やや多	少	・うどんこ病多発園では8月下旬に防除を行う。
ハマキムシ類	少	少	少	・ハマキムシ類幼虫は葉と葉が重なった部分や、ヘタと果実の間に多く潜んでいるため、薬剤はかかりムラがないよう十分量を丁寧に散布する。 ・ハマキムシ類の発生が多い園では、8月上旬～中旬の防除を徹底する。

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

発病葉数 3.1葉(平年0.6葉、前年0.1葉)

発生ほ場率 87.5%(平年15.3%、前年16.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

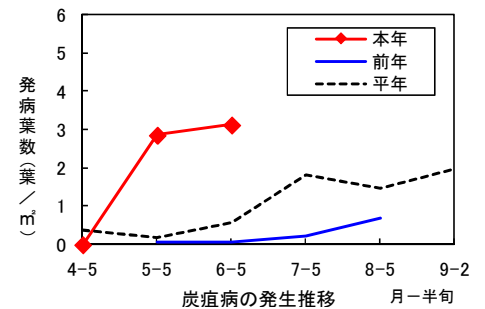
(3) 防除上の注意

ア 摘採・整枝後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。

イ 雨滴により胞子が飛散伝搬するので、降雨前の防除効果が高い。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p10の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



※ 前年の4-5は未調査。他のグラフも同様。

2 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-~±)。

被害葉数 0葉(平年0.01葉、前年0.05葉)

発生ほ場率 0%(平年2.6%、前年16.7%)

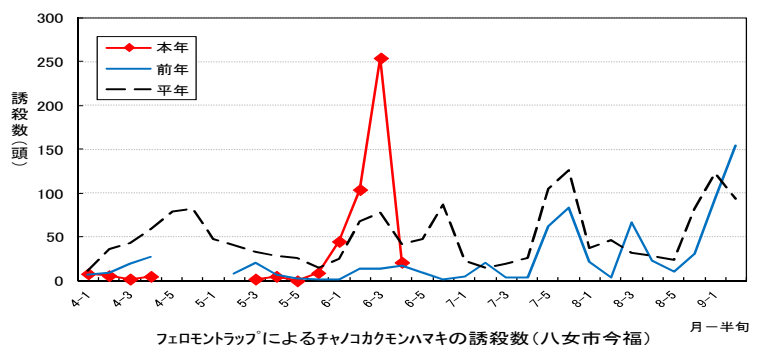
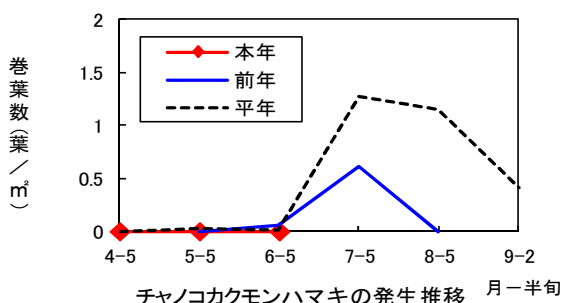
※新葉が少ない時期のため、必然的に被害葉(巻葉)は少ないが、ヨコバイ等の調査のたたき落としの際、チョウ目の若齢幼虫が多数落下した園も見られた。

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月下旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。



3 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

被害葉数 0葉（平年1.0葉、前年0.04葉）

発生ほ場率 0%（平年26.5%、前年16.7%）

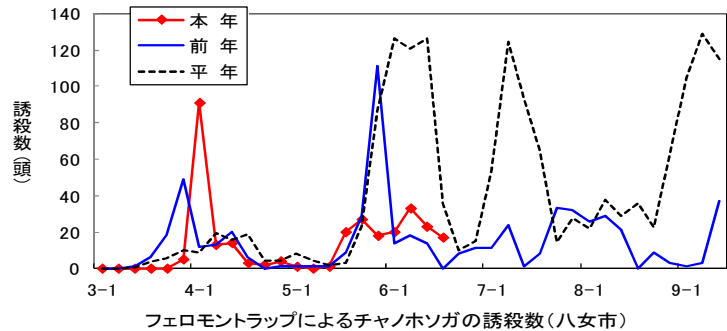
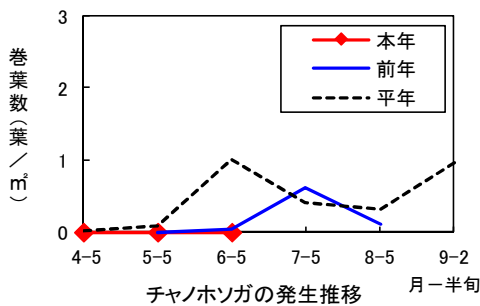
※新葉が少ない時期のため、必然的に被害葉（巻葉）は少ないが、ヨコバイ等の調査時のたたき落としの際、チョウ目の若齢幼虫が多数落下した園も見られた。

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月上～中旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。



4 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（+）。

たたき落とし虫数 1.5頭（平年0.7頭、前年0.9頭）

発生ほ場率 100%（平年49.4%、前年57.1%）

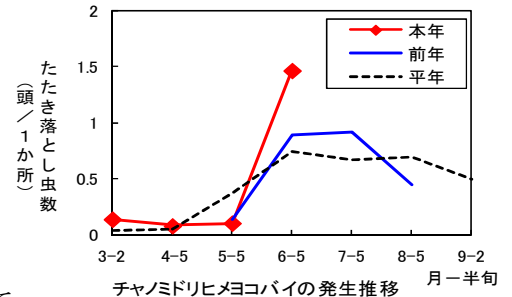
イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

(3) 防除上の注意

ア たたき落とし（B5版上）で4頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。

ウ 効果の高い薬剤が少ないので、多発する前に防除する。



※ 畝の雨落ち部4か所の枝をたたき、紙上に落ちた虫の数を平均。

5 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

寄生葉率 0%（平年6.4%、前年0.6%）

50葉当たり虫数 0頭（平年20.2頭、前年0.1頭）

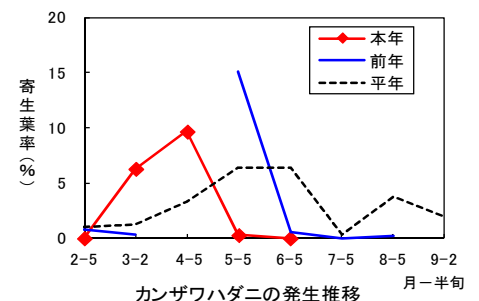
発生ほ場率 0%（平年31.2%、前年14.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

(3) 防除上の注意

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の茶園では、摘採後、多発する前に速やかに防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



6 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(－)。

たたき落とし虫数 0.3頭(平年6.9頭、前年1.5頭)

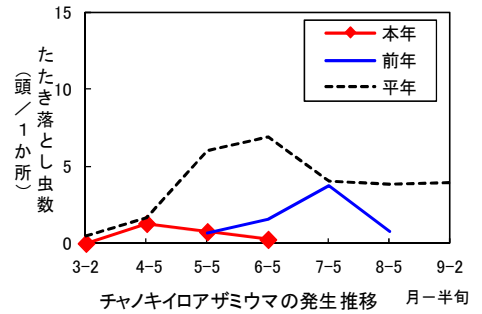
発生ほ場率 37.5%(平年86.9%、前年66.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生条件となっている(－～±)。

(3) 防除上の注意

ア 発生状況に留意し、たたき落とし(B5版上)で10頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



※ 畝の雨落ち部4か所の枝をたたき、紙上に落ちた虫の数を平均。

7 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

発生量：前年より多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は前年より多かった(+)

寄生葉率 16.0%(前年3.7%)

50葉当たり虫数 23.4頭(前年4.9頭)

発生ほ場率 100%(前年42.9%)

※チャトゲコナジラミは平成24年頃まで発生地域差が非常に大きかったので、平年値はなし。

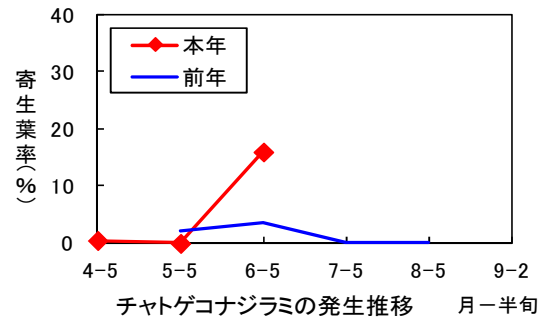
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生条件となっている(±)。

(3) 防除上の注意

ア チャトゲコナジラミは年3～4回発生を繰り返す。防除適期は若齢幼虫発生期であり、新世代成虫の発生ピークが収まった頃である。直近の成虫(第1世代)発生ピークは、7月上～中旬と予想される。

イ 第1世代成虫は越冬世代成虫に比べて数が少ないので、目視で園を飛行する成虫の多寡を判断するのは困難である。黄色粘着板を設置すれば、成虫の付着数によって多寡を判断できる。

ウ 幼虫は葉裏に寄生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。



【茶：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (7月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
もち病	多	多	多	<p>三番茶を摘採する園では二番茶摘採後、摘採しない園では秋芽について、各々萌芽から1葉期までに防除を行う。</p> <p>6月5半旬調査では、平坦地でも、更新後の残葉などに発生が多く見られたので、平坦地でも防除を行う。</p>

【野菜：イチゴ（育苗期）】

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

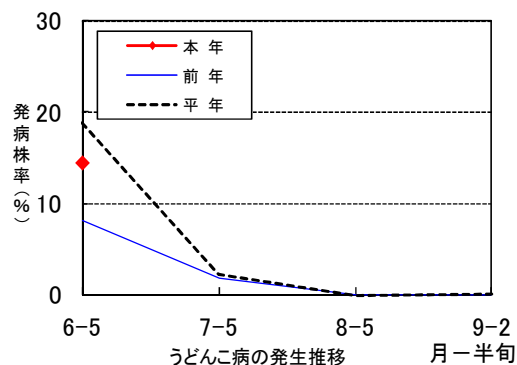
発病株率 14.5%（平年 18.9%、前年 8.2%）

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（+）。

(3) 防除上の注意

ア 技術情報第5号参照。

イ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p10の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

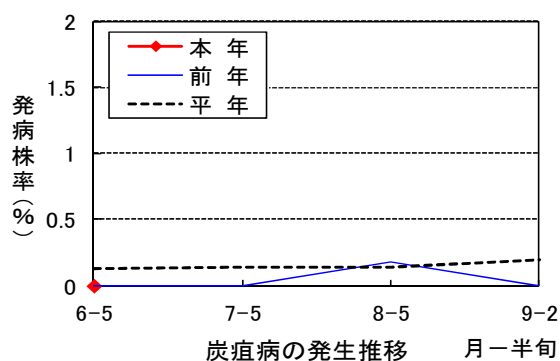
ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0%（平年 0.13% 前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（+）。

(3) 防除上の注意

技術情報第5号参照。



3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

寄生株率 7.8%（平年 9.3% 前年 11.7%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

(3) 防除上の注意

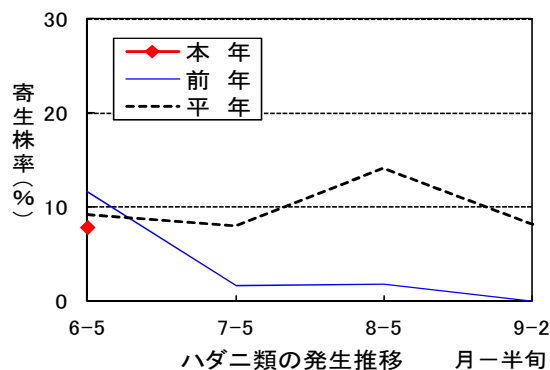
ア 不必要な親株は速やかに育苗ほから撤去する。

イ ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

ウ 摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニール袋等に入れて密封し、処分する。

エ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。

オ 抵抗性がつきやすいので、同一系統薬剤の連用は避ける。



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しました。
携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。



福岡県病害虫防除所